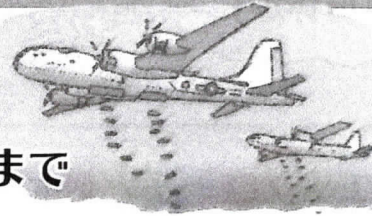


特別寄稿

戦時下での新卒歯科医の動向 陸軍歯科医将校時代から終戦まで



上田小県歯科医師会 布施 祐一 談（布施 修一郎 記）

2021年9月某日、東京歯科大学名誉教授（前学長）金子讓先生よりあるご依頼を受けました。氏は、東京歯科大学学会の学会誌歯科学報に「戦時下の歯科医学教育」のタイトルで6編を投稿済みですが、第7編に掲載すべく戦時下の東京歯科医専での卒業前後の情報を得たいので、私の父が存命（当時103歳）と聞き、「お話をお聞きしたい」とのことでした。このことを父に伝えたところ、覚えている限りのことであれば協力したいが、耳が遠いのでお話しは難しいとのことでしたが、幸いというか、凄いことに、昔から器械に強かったのでiPadを使ってのメールのやり取り及び文章の作成は可能な為、お引き受けすることになりました。その論文の中に引用された父の文には、これまでに聴いたことのない話もあり、これに私が少し加筆して信州歯報に載せていただければ、貴重な体験・記憶文として残ると考え、私（長男 修一郎）が父の了解を得た上で投稿することにしました。

昭和16年12月8日、太平洋戦争開戦に伴い、翌年3月卒業予定だった学生は、全て3ヶ月の短縮繰り上げ卒業となり、私が在学中だった東京歯科医専でも12月26日に卒業式が行われましたが、その前に徴兵検査が実施されました。場所は忘れましたが、広い部屋に大勢の学生が一堂に集められ、軍医により一般検査、四つん這いになっての痔の検査、その後M検（ペニスによる性病検査）が実施されました。私は、第一乙種合格でした。松本の東部50部隊入隊は昭和17年2月初旬、雪の降る中での入隊式で、その時の入隊者は全員学生でした。人数は覚えていません。

初年兵（陸軍2等兵）として入隊後、4月に甲種幹部候補生試験に合格、更に、引き続き衛生部幹部候補生（歯科医将校候補生）を志願（採用試験のことなど全く覚えておりません）し、運よく合格しましたが、松本における約4ヶ月に及ぶ初年兵教育（一期教育）は正に古参兵によるいじめとしか言いようのない様な極めて理不尽で本当に過酷なものでした。私達はただそれを耐え忍ぶしかありませんでしたが、中にはその厳しさに耐えられず精神に異常をきたした兵も数名いたくらいで、被害者には東大生も1名いました。尚、当時初めて制定された歯科医将校幹部候補生（衛生部

甲種幹候）の採用は極めて少なく、当時の1師団で1名のみ、あとは乙種候補生として衛生下士官となり、それ以外の諸氏は兵科の幹部候補生として多くの方が豊橋予備士官学校に入校しました。金沢師団管区での志願者は100名以上いたらしいのですが、何故私のようなボンクラが合格者になったのか？未だに不明です。話が逸れましたが松本での訓練を終え、晴れて陸軍軍医学校（現在の新宿区戸山町にあった）に他の軍医・薬剤候補生とともに入校しましたが、ここでは歯科独自の教育は少なく、むしろ軍医候補生と一緒に教育を受けることが多かったのは意外でした。教育は約3ヶ月の短期間でしたが、大腿の切断手術、気管切開、胸部レントゲン写真の読影、コレラ等伝染病対策、毒ガスの体験等、専門外の貴重な体験をしました。尚、全国からの歯科医将校候補生の入校者は20名のみで、その中には、東京歯科医専の同期生も数名いたと記憶しています。

昭和17年7月末、軍医学校における全課程を終了後、衛生部見習士官として金沢第一陸軍病院（以下金病）に着任しました。然し、見習士官の間は外出もままならず、本院に近い分院内の兵舎での営内居住で、2人の医科の見習士官と同部屋で任官までの数ヶ月間起居をともにしましたが、

彼等との交流を通じ多くのことを学びました。その後、昭和18年に幹部候補生学校出身第一期生の陸軍歯科医少尉を拜命、営外居住で下宿先からの通院となりました。当時金病歯科には、日中戦争で召集され、途中歯科医将校制度制定により兵科から転科した高橋中尉が既に先任将校として勤務していましたが、私の着任後間もなく召集解除となり、富山の実家に帰り直ぐ結婚されました。当時金沢には歩兵を始め各科部隊があったので歯科の患者も多く、短縮卒業で臨床経験も碌に無い私にとっては、現在の様なタービンどころか電気エンジンさえも無く、足踏みエンジンのみの状況で本当に苦労しました。そんな中で特に最も苦労したのは、騎兵隊の兵が馬に蹴られての下顎骨骨折の処置でした。全く未経験の顎間固定の方法も分からぬ中、唯一頼りになったのが故遠藤至六郎教授の『口腔外科通論及手術学』でした。その後もこの名著に救われることが多く、お陰で歯科軍医としての使命を曲がりなりに全うできたことに心から感謝せざるを得ません。以下、臆げな記憶から思い出すまま述べていただきます。

- 1) 昭和18年秋頃だと思いますが、師団に動員令が下り、私もトラック島守備部隊の野戦病院付きとして出動を命じられました。私の部下の衛生兵4名のうち1名も選ばれました。ところが、どういうわけか途中で命令が変更になり、あろうことか私の代わりに新婚早々の高橋中尉が再召集を受け、しかも乗船中の輸送船が上陸日の払暁、米軍の魚雷攻撃で兵員の大半が犠牲になり、高橋中尉も戦死の情報に接し、正に私の身代わりになってしまったと言え中尉には、ただただ申し訳無いと思う他は無く、この思いは私の生きている限り消えさることはありません。
- 2) 師団に動員令が下ると戦地に行く前に治療しておこうと、各部隊からの患者が殺到しましたが、治療など望めない前線の事情を考慮し、殆どが抜歯でした。お陰で抜歯の腕が上がりました。
- 3) こんなハッピーングも——時の師団長閣下が顎関節脱臼で突然来院され、緊張して震える手

でなんとか整復に成功し、大いに感謝されたことを記憶しています。

- 4) 当時入院中の野戦帰りの傷病兵の間で蔓延していた退屈紛れの賭博行為が軍紀風紀上芳しく無いとのことで取り締まりの必要性に迫られ、見つけ次第花札などを取り上げていましたが、とかく厳しさを欠く年配の軍医予備員将校の多い中、若手としてその役を私が仰せつかったこともありました。
- 5) 戦況が進むにつれ、今まで比較的優遇されてきた病院の食事情も次第に悪くなり昭和19年頃には、主食は米や麦に代わってピンク色の高粱、米（色は綺麗だったが不味かった）に大豆が入り、魚はボラ（近くの河北潟で採れた）が頻繁に出て、これもあまり美味しくなかったことを覚えています。
- 6) 病院着任後間もなく、次期（昭和17年9月卒）衛生部幹部候補生（歯科医将校）採用試験問題作成を仰せつかりましたが、合格者は甲種、乙種各1名のみの狭き門で、その合否が同じ歯科医師の資格を持つ受験者たちの明暗を分けることを考えると、責任の重大さを痛感せざるを得ませんでした。殊に、当時学校を出たばかりの無能の私にとって荷が重すぎる大役をどの様に果たしたのか？その辺の詳しい事情は、80年の時を経た現在、残念ながら殆ど覚えていません。
- 7) 福井、富山の空襲
昭和19年11月ごろから始まった東京を始め、全国主要都市への無差別攻撃により大きな被害を受けました。金沢の両隣り、福井、富山の空襲では両市共壊滅的な被害を受けました。昭和20年7月19日夜に福井市、同年8月1日から2日にかけて富山市で、特に富山市の被害は甚大で、市の中央を流れる神通川の河原に避難して焼夷弾の直撃を受けた市民も多く、遺体処理班として出向きましたが手足の吹き飛んだご遺体が多く、凄惨を極めました。金沢では空襲警報が鳴り、空を見上げるとB29の編隊が続々と富山方面に向かい、やがて富山の空が火災で

真っ赤に染まるのを呆然と眺めるのみでした。福井、富山とくれば当然次は金沢と思い、覚悟を決めていましたが、金沢は空襲が無いまま終戦を迎えました。軍都金沢が空襲を逸れた理由については諸説ありますが、未だに謎のままです。

- 8) 失敗談もあります。ある時軍刀の切れ味を試してみたくなり、手ごろな太さの木の枝に切り付けたところ刀身が曲がって鞘に収まらなくなり慌てて磨工室（医療器具の研磨や修理をする部署）に頼んで直して貰いましたが、完全には直りませんでした。尤も、当時私の所有していた軍刀は「昭和刀」と言う日本刀とは全く別物、器械で作刀、量産された代用品でしたから、簡単に曲ってしまうのも頷けます。また、ある時は元々下戸なのに上官に無理やり飲まされ、酔って、いつも通勤で通っている兼六園の中で眠ってしまって、雪の降り始めたのにも気付かず、半ば雪に埋れた状態で通行人に起こされ事なきを得ました。
- 9) 昭和20年8月15日の玉音放送を聞いた時は、昭和19年頃に、既に内部情報等により敗戦は避けられないものと薄々覚悟はしていたものの、やはりショックは隠せず、暫し呆然としていたことが思い出されます。
- 10) 終戦後漸くマッカーサー中尉に昇進しました。当時、将校は全員死刑などと言う流言飛語が流れ、不安な日々を過ごしていましたが、別段変わったこともなく、昭和20年9月に召集解除となりました。帰郷の前夜、護身用に所持していた拳銃（ブローニング6連発）を折りからの大雨の雨音に発射音が紛れて人に聞こえぬのを利用して全弾地面に撃ち込み、関係者に提出して処分しましたが、この拳銃に目をつけた暴力団が欲しがり、困惑したことを覚えています。また、20～30発で銃身が熱々になったのを覚えています。
- 11) 昭和20年敗戦の色濃くなり、本土決戦が叫ばれ始めた頃、上陸してくる敵戦車に対しての特攻が計画されました。棒の先に爆薬をつけて

戦車の後方死角より肉薄、体当たりで爆破榴座させる戦術で、何故か我が病院に於いてもトラックを戦車に見立てて同様の演習が実施され、国を守るため状況によっては非戦闘員といえども特攻もやむなしとの覚悟を新たにしました。

- 12) 終戦後、病院も可成り混乱状態になり、敗戦の絶望感からか入院患者の中で少数ながら自殺しようとするものがありました。首吊り自殺1人、切腹2人（未遂）。
- 13) 終戦後、予ねて金沢市郊外に疎開してあった衛生材料その他の物品回収に向かう途中、たまたま出会った朝鮮人に舌足らずの日本語で侮辱された上、石まで投げつけられましたが、反撃は一切許されず、敗戦国の惨めさを痛感せざるを得なかった事が、今以て忘れられません。
- 14) 終戦後陸軍病院が国立病院に変わり、そのまま留まっていた私の身分も厚生技官となり、1年間程の勤務後、大阪大学医学部口腔外科の専修生になっていたのも三重県の大安病院の歯科新設に携わり、3年間の勤務を経て帰郷、昭和24年に現在地にて一理堂歯科医院を開設いたしました。爾後70年、昭和58年に長男修一郎が、平成30年からは孫の佑磨が継承しており、次男隆二も昭和58年に市内で開業、孫の利人と共に診療に従事しています。

父（祐一）と私（修一郎）の会話の中で新たに思い出して話してくれたことなども記載してみます。

初年兵（2等兵）として松本に入隊した際には同じ上田市出身、東京歯科医専同期の故柳沢一郎先生も一緒でしたが、氏は豊橋の予備士官学校に送られ、その後、インパール作戦に動員されました。ご長男の柳沢清彦先生談「父は戦時中のことについては殆ど話してくれませんでした。マラリアで野戦病院に入院していたため、突撃隊には加わらなかったそうです。参加した人は殆どが亡くなり、武器、弾薬が調達できずにジャングルの中を逃げ回ったと聞いています」。マラリアのおかげで日本に生還できたと言えましょう。もう

1人松本市出身で柳沢先生と同様、東歯も同期、入隊も一緒だった方に、故矢島一美先生がおられ、先生も無事生還されています。同じく、父と歯科医専同期の故百束尚彦氏は歯科将校となれましたが南方でなく北方四島の野戦病院付きとなった為無事生き残り、千葉県歯科医師会長を歴任されました。

1)の高橋中尉が亡くなられた輸送船には、金病歯科の部下1名も乗っていましたが彼は生還しました。彼曰く、就寝中にドカンと大きな音がし気がついたら、海中にて板切れにつかまった状態だったそうです。以上の幾つかの事実から、まさに軍隊は運隊と言えましょう。

12)の切腹は、狭い防空壕の中でしたので刀がつかえてしまった為、未遂に終わったそうです。また、父達は最初の繰上げ卒業でしたので12月でしたが、次年度からは、更に短縮、9月卒になったそうです。これらは、学徒動員に当たりますが神宮の雨の中を学生が行進する学徒動員の画像は終戦間近になってからのものだそうです。

14)の三重県にいたころ、旧制中学校の同級生で海軍兵学校を経て、潜水艦の艦長となり、米国の艦船を多数撃沈した海兵第66期山辺雅男という元軍人が、A級戦犯として逃げ回っていましたが、父のところにも尋ねてきました。後で、調べがありましたが、知らぬ存ぜぬで通し、彼は無事逃げ延びました。

その他に、平成9年の信州歯報6月号の「県歯群像」の記事の中で、上記高橋中尉の葬儀に参列し弔辞を読んだが、新婚早々の奥様に泣かれ、家族の顔を見るのが耐えられなかった、長い人生の中で最も辛い思い出と記載されています。また、幹部候補生の試験を担当した際、受験兵の家族が菓子折りを持って深夜に下宿に来て嘆願されたが、親心とは言え、戦時下にそんな身勝手な行為が許される筈もなく、即、お断りしてお引取り

願ったそうです。また、短縮教育を受けることにより、医師免許の取得が出来ることとなり奨められました。また、旧制中学や歯科医専の同級生にも戦死者が多く、同じく戦争に参加しながら生き永らえていることには、正直、後ろめたさを感じると信州歯報平成2年1月号の「にゅういやあエッセイ」の中で述べています。

このように戦時下の繰上げ卒業の新卒歯科医の殆どは壮絶な数年間を過ごされたか戦死されたと思われるが、生き残られたとしても既に鬼籍に入られたか、ご存命でも記録に残せるような資料提供ができない状況におられると思いますので、生き証人としての父（現在104歳）祐一のこの記録は貴重なものと思います。もし、父がトラック島に赴任となっていたならば、私達兄弟、息子、娘、孫はこの世にいなかった可能性があり運の良さを感じております。

参考資料

- 1 金子 讓 他「戦時下の歯科医学教育 第7編 最後の教育令と学徒義勇戦闘隊の本土決戦準備」『歯科学報』第122巻第1号P58-92、2022年
- 2 長野県歯科医師会「にゅういやあエッセイ 布施 祐一」『信州歯報』313（平成2年1月）号P13-14、1990年
- 3 長野県歯科医師会「「軍隊は運隊」「一理堂」開業」『信州歯報』405（平成9年6月）号P14-15、1997年
- 4 柳沢清彦会員（上田小県）からの伝聞

